［博士論文審査の要旨］

本論文は、20 世紀初頭に敦煌石窟をはじめシルクロード各地から出土した古チベット語占い文書の総合的研究である。古チベット語の占いは、骨、骰子（さいころ）、銅銭、烏（からす）の声、夢、日時による占いなど、占法や内容書式が多様である。本論文では、その中でも最も重要な、銅銭占い、鴉鳴（あめい）（烏の鳴き声）占い、骰子（さいころ）占いという 3 種類の占卜書に焦点をあて、詳細な分析を行っている。

各章では、 ①全文書の概説、②翻字テキストと翻訳の提示、③書式の解明、④他言語文書との比較研究、⑤文書の成立背景、という観点から占いのジャンル別に文書間の関係性をまとめ、最後に、古代チベット社会における占いの全体像についての現段階の見解を述べている。

膨大なチベット語文献の中から占い文書を網羅的に摘出し、難解な文書を言語学・文献学的方法論をもちいて緻密に解読し、その年代と社会言語学的背景、さらには他言語文書との比較まで射程にいれた研究は、世界で初めてのものであり、本論文が世界の学界に対して大きな貢献となる事は疑えない。以上の理由にもとづき、本審査委員会は、本論文が学位請求論文として高い評価に値するものと判断する。

［論文審査結果］

本論文では、「はじめに」において、申請者がこれまで見いだし同定して来たすべての古チベット語占い文書計５９点を、骰子（さいころ）、銅銭、鴉鳴（烏（からす）の声）、日時、夢、骨、のジャンルごとに分類し、その所蔵先、文献番号、カタログ・テキスト、出土地などの情報を含めて網羅的にリストアップされている。これは、古チベット語占い文書についての世界でもっとも網羅的なリストであり、リストそのものが学界にとって大きな価値をもつものである。

第 1 章は、銅銭占卜についての詳細な分析である。文書断片の照合の結果、パリ国立図書館所蔵ペリオ蒐集コレクション中の１点と、大英図書館所蔵スタイン蒐集コレクションに属する１点の接合に成功した。その結果、古チベット語銅銭占卜文書は、 ITJ 741、P.t.1055 + ITJ 744 および P.t.1056 が属す流通本と、それ以外の２文書（ITJ 742、ITJ 1239）に大別された。次に、チベット語銅銭占卜文書と漢語文書との比較研究によって、両者の間には占法と内容構成にある程度の符合はみられるものの、それぞれが独自の書式を有している、つまり両者に共通する祖本の存在が想定できないと結論づけた。とはいえ、銅銭占卜は、中国に起源を持つ占いであり、チベット語文書には漢語文書や中国文化からの影響が多分にみられることに加えて、両者は、占卜法の淵源を周易に求めるというアイデアを共有している。その際、チベット語文書では、孔子や中国の皇帝を占卜の始祖とし、いっぽう漢語文書では、老子や周公がその役を担っている。これらの占卜来歴は、銅銭占卜の正当性や効果を訴えるための由緒として提示された可能性が高い。しかし、そこにみられる着想の一致こそ、両文書の成立背景を傍証するものであると考えられる。申請者

は、 以上の考察にもとづき、チベット語銅銭占卜文書は、吐蕃（チベット帝国）期から伝わるチベット語占卜文書の書式に中国占術を融合させた文献であり、おそらく 10 世紀の敦煌漢人社会の中で作成され、流行していた占卜書であった、と結論づけている。

第２章は、鴉鳴占卜文書についての研究である。６点の文書を比較対照した結果、流通本とヴァリアントと呼べる２系統に大別できることが判明した。また、漢語鴉鳴占卜文献との比較研究の結果、両者に現れる鴉鳴占卜一覧表は、チベット独自の創作であり、それが後に漢文占卜文書中にも翻訳借用されるようになったと結論づけ、その借用の過程で、『百恠圖』に類する書式を持つ占卜記事とともに収録されたことを突き止めた。一方、インドからチベット語に翻訳され、現代にまでつながる Kākajariti と呼ばれるインド起源の鴉鳴占卜は、古チベット語鴉鳴占卜文献とは直接関係しないより後代のものである事を論証した。以上の考証の結果として、チベット語・漢語・インド典籍の烏占卜文献の相関図を仮説として提示している。

第３章では、文書構成の視点から骰子占卜文書を２系統に分類し、それぞれの書式を画定する。骰子占卜文書は、チベット帝国内の広い地域で使用された占卜書であり、敦煌では、チベット支配期以降も作成され続けていた。古代チベットでは、骰子が諸々の争議・訴訟においても決定力をもつ重要なツールであり、骰子を用いた占卜も特別な占卜法とされていたと考えられる。そのため、骰子占卜文書には、他の占卜書にはみられない内容豊かな韻文や、様々な神格が描かれており、吉凶と強い結びつきを有する韻文や神格は、吉凶を導く、あるいはその具体像を心象風景に投影する機能を果たしていた。さらに、骰子が重要視された社会においては、骰子占卜も中央政府の管理下にあり、占卜の組み合わせの規範が一定の年毎に出されていた、と指摘している。

以上概観したように、申請者は、古チベット語占い文書の詳細な分析と他言語文書の比較によって、古チベット語占卜文書の時代的背景とその成立過程ならびに他言語文書との関係に光をあてることに成功した。古チベット語占卜文書の全体像の輪郭が、本論文によって初めて明らかになったといえる。その意味で、本論文の学問的価値は高く評価できる。

［最終試験結果］

最終試験は、2012 年 7 月 2 日午後 3 時から三木記念会館で実施され、武内紹人（主査）、太田斎、林範彦および今枝由郎（フランス国立科学センター教授）が審査にあたった。冒頭に申請者が論文要旨のプレゼンを行った後、質疑応答が２時間半にわたって行われた。

審査委員からは、論文構成の適切性、術語の説明の過不足、難解なチベット文および漢文の解釈など，文書の社会言語学的背景など多岐にわたる質問があり、充実した論議が交わされた。

公開審査終了後、全委員で合議を行い、当該論文が地道な研究調査の積み重ねにもとづく精緻な研究成果であり、学界に大きな貢献をもたらす研究として高く評価できる点で合意が得られ、最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。